富山県福光町

岩木遺跡

－個人住宅建設に先立つ発掘調査報告－

1994年３月

福光町教育委員会

序

この報告書は、個人住宅造成工事に伴い、福光町教育委員会が平成５年度に実施した岩木遺跡の発掘調査報告書であります。

岩木遺跡は、福光町北端の岩木地区に位置する遺跡であります。本報告書は十分ではありませんが、同地域の歴史、文化の解明に役立たせていただくとともに、本書を通じて埋蔵文化財の保存に対する、なおいっそうのご理解とご協力をいただければ幸いです。

発刊にあたり、調査に際して寄せられた関係各位のご尽力に対し、深甚なる謝意を表する次第です。

平成６年３月

福光町教育委員会
教育長　吉江正二

例　　言

1．本書は、個人住宅建設に先立ち実施した、福光町岩木遺跡の発掘調査の概要報告である。

2．調査期間・発掘面積は以下の通りである。

調査期間：平成５年７月１日～同年７月22日（実働11日間）

発掘面積：約290㎡

3．調査は、福光町教育委員会が主催した。調査費用は、福光町が負担した。現地調査・遺物整理にあたっては、富山県埋蔵文化財センターから職員の派遣を受けた。

4．調査事務局は、福光町教育委員会振興課が調査事務を担当し、教育長吉江正二が総括した。

5．調査参加者は次の通りである。

調査担当者：富山県埋蔵文化財センター企画調整課　文化財保護主事　島田修一・伊佐智法

調　査　員：富山県埋蔵文化財センター企画調整課　文化財保護主事　岡本淳一郎

6．本書の作成・遺物整理にあたっては、下記の方々から種々のご援助を頂いた。記して謝意を表したい。（敬称略・五十音順）

安念幹倫・伊藤隆三・上野　章・宇野隆夫・越前慶祐・岡本淳一郎・押川恵子・河西健二・狩野　睦・岸本雅敏・久々忠義・小島俊彰・斉藤　隆・酒井重洋・佐賀和美・境　洋子・関　清・高木場万里・高梨清志・塚田一成・橋本正春・林　浩明・麻柄一志・松島吉信・桃野真晃・山口辰一・山本正敏・山森伸正

7．本書の編集は島田・伊佐で行い、執筆は富山県埋蔵文化財センター職員の助言・協力を得て、島田・伊佐と福光町教育委員会主事　荒井　隆が行った。個々の責は文末に記した通りである。

8．本書の土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著　1967　『新版標準土色帖』㈱日本色研事業に準拠している。

目　　次

Ⅰ．**地形と周辺の遺跡**……1

第１図　位置と周辺の遺跡……1

Ⅱ．**調査の経緯**……2

第２図　調査区位置図……2

第３図　試掘トレンチ位置図……3

Ⅲ．**調査の概要**……3

1.調査の方法……3

2.基本層序……4

第４図　基本層序模式図……4

第５図　地形及び区割図……4

3．調査日誌抄……4

4．遺　　構……5

第６図　ＳＫ01実測図……6

第７図　遺構全体図……7

5.遺　　物……8

第８図　遺物実測図……8

第９図　遺物実測・拓影図……9

Ⅳ．**まとめ**……11

引用・参考文献

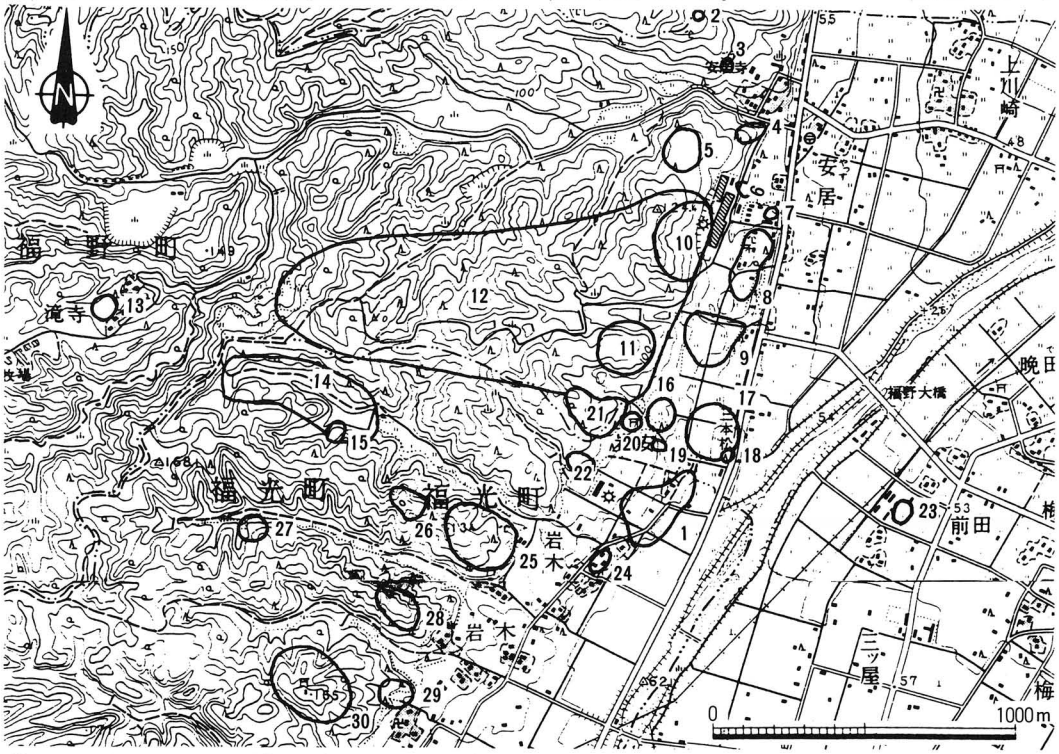
報告書抄録

Ⅰ．地形と周辺の遺跡

岩木遺跡は、富山県西砺波郡福光町岩木地内に所在する（第１図）。福光町は、富山県の南西部に位置し、干し柿作りや木工産業で有名な人口約23,000人の町である。町の中央部を小矢部川が北流し、その両岸には平野部が広がり散居村で有名な砺波平野の一画を成している。町の南西部は石川県と境を接する山地にあたり、養老３年（719年）泰澄大師によって開かれた霊峰医王山をはじめ、建築材等に用いられた桑山石・小院瀬見石を産する山々が連なる。

当遺跡は、平成２年に民間工場用地造成に伴う分布調査によって発見された遺跡であり、医王山の北部山麓にあたる小矢部川左岸の低位段丘上に立地する。標高は約65ｍを測り、遺跡の東端部を法林寺断層と呼ばれる断層が南北に走る。

当地域は地理的好条件や医王山の開山に相まって、古くから開けた地域であり、第１図に示したとおり古代砺波郡における一大窯業生産地であった安居・岩木窯跡群をはじめ縄文時代から中・近世にかけて様々な遺跡の存在が知られている。なかでも塚・経塚・寺社名に関連する地名・遺構が多く、山岳信仰文化の華々しい展開を偶ばせる。反面、中世居館や城跡なども見られ、加越国境であった当地域の宗教活動とは異なった一面を伝えている。　（島田　修一）



第１図　位置と周辺の遺跡（S＝1/25,000）

１．岩木遺跡、２．備中ヶ岡古墳(古墳)、３．伝長慶天皇御陵(中世)、４．石黒墳墓(中世？)、５．堂山遺跡（旧石器・縄文・奈良・平安)、６．安居Ｄ遺跡（弥生・古墳)、７．安居Ｃ遺跡(縄文)、８．堀池島遺跡(縄文・古墳・・奈良・平安・中世)、９．五百歩遺跡（縄文・弥生・奈良～室町)、10．安居遺跡（縄文～平安)、11安居城跡（中世)、12安居窯跡群（古墳・奈良)、13．滝寺跡（不明)、14．北谷古窯跡群(奈良・平安)、15．北谷遺跡(縄文)、16．善法寺遺跡(奈良・平安)、17．三本松遺跡(縄文・奈良～中世)、18．安居一里塚(不明)、19．善法寺法印墓(室町)、20．岩安神明神社遺跡(中世～近世)、21．善法寺古墳群(古墳)、22．岩安遺跡(縄文・古代)、23．前田館遺跡(戦国？)、24．岩木経塚(中世)、25．寛勝寺跡(近世)、26．志留志塚(古代)、27．中宮谷窯跡(古代)、28．諏訪社跡(近世)、29．岩木尻広谷窯跡(古代)、30．愛宕社跡(近世)

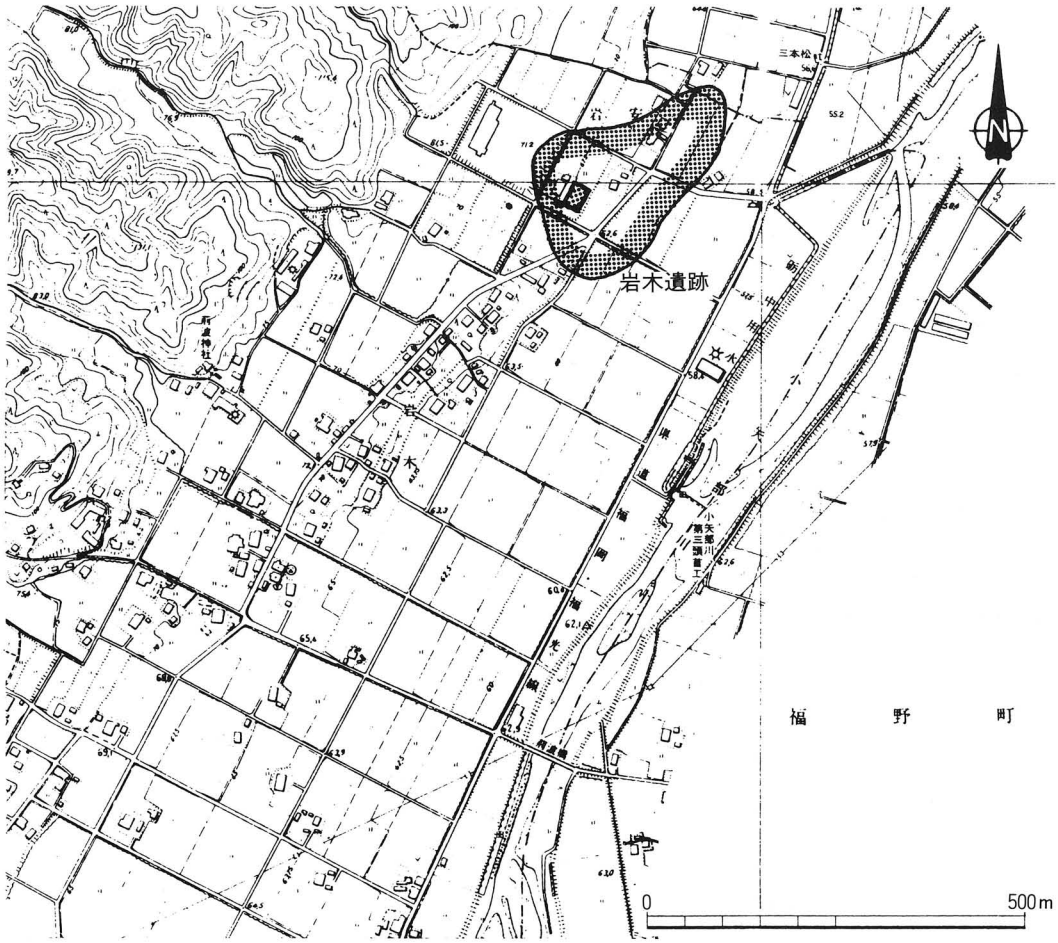
II．調査の経緯

平成５年５月期の農地転用の許可に関し、県農政課から県文化財に埋蔵文化財の有無について意見照会があり、岩木地区の住宅建設予定地が、周知の遺跡である岩木遺跡に含まれるため、文化財保護法に基づく取扱いが必要である旨回答された。また、これに伴い、福光町教育委員会は、県文化課から文化財保護法に基づく取扱いが必要である旨通知を受けた。その後、県教育委員会と協議を行い、埋蔵文化財センター職員の派遣を受け、試掘調査を行うことになった。

試掘調査は、平成５年６月17日に行い、調査対象面積は約1,000㎡であった。調査区の４箇所で幅約１～３ｍのトレンチを任意に設定し、遺構及び遺物の遺存状況を確認した。

調査の結果、北西部を中心とする約650㎡で、岩木遺跡の遺存が確認された。遺物は、須恵器・土師器・中世土師器・珠洲が出土し、遺構は、溝（１条）と土坑(4)を確認した。

この試掘調査の結果に基づき、富山県教育委員会・福光町都市振興課と協議した結果、宅地建設にかかる約210㎡について早急に本調査を実施し記録保存することとなった。　　（荒井　隆）



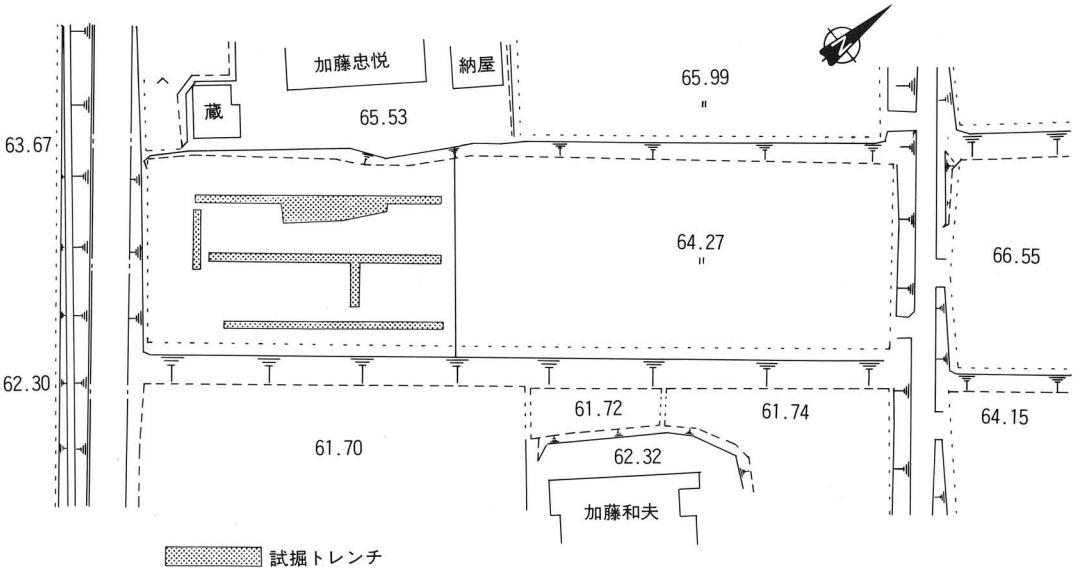
第２図　調査区位置図（S＝1/10,000）

Ⅲ．調査の概要

１．調査の方法　調査は、まず、バックホウにより調査区（210m²）の表土（現耕作土）の除去を行った。その後、人力により、暗褐色シルト質ローム及び明黄褐色シルト質ロームまで掘り下げて遺構確認作業を行い、引き続き個々の遺構の検出を行った。なお、時期的にも雨の降りやすい時期でもあることから、調査区の外縁に沿い水抜きの測溝を掘った。その後、遺構実測図作成のため、調査区に任意に起点を設定し、５×５ｍのグリッドを一区画として発掘区に杭を打ち、大グリッドを組んだ。座標軸は東西がＹ軸、南北をＸ軸とした。さらに調査精度を高めるため、１×１ｍをグリッド最少単位とし、西から東にかけ、１ｍごとにＹ１・Ｙ２・Ｙ３…、南から北にかけ１ｍごとにＸ１・Ｘ２・Ｘ３…と表現することとした。そして、グリッド最少単位を（Ｘ２・Ｙ３）と表現し、遺物取り上げなどに活用した。検出遺構については、掘立柱建物をＳＢ、土坑・穴はＳＫ、溝はＳＤと表記し、ＳＫ01・02・03…と連番で表記することとした。

なお、調査面積は、当初210m²であったが、遺構精査段階でＳＢ01が北方に延びる可能性があるため北へ80m²拡張し、結果として調査面積は、290m²となった。　（伊佐智法）

試掘トレンチ



第３図　試掘トレンチ位置図（Ｓ＝1/1,000）

2．基本層序（第４図）

盛土　第１’層は盛土であり、西側で０～10cm、東で20～30cmの厚さとなる。

包含層　包含層である第２層は、南に行くに従い薄くなる。西側には存在しないが、東側は盛り土下に５～20cmの厚さで存在する。黒色シルト質ロームである。

遺構検出面　検出面は第３層の上面、及び、第４層の上面と、２つの面があったが、調査期間との関係等により、第３層と第４層の時期差等の詳細は明らかにできなかった。西及び南部では、第１・１’の直下に第４層が露呈する状況にある。また、この第４層上には重機の跡が顕著に見られることから、かつての圃場整備による大規模な削平が窺われた。

3．本調査日誌抄

７月１日(木)　表土剝ぎ

７月５日(月)　側溝掘り

７月６日(火)　遺構検出作業開始（ＳＤ・ＳＫ・ＳＢを確認）

７月７日(水)　遺構の発掘作業開始。

７月８日(木)　遺構発掘作業・北側へ80㎡拡張

７月９日(金)　遺構発掘作業

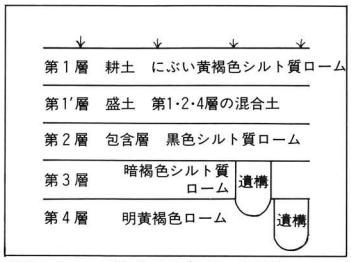
７月15日(木)　作業・図化作業（遺構断面図）

７月16日(金)　図化作業（遺構断面図）

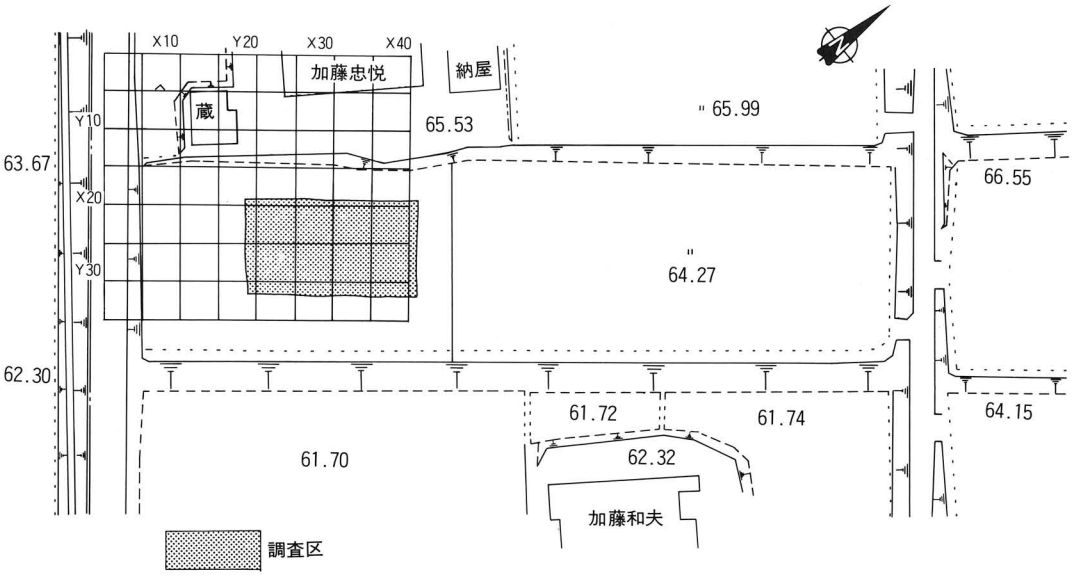
７月20日(火)　図化作業（遺構断面図）・遺構発掘作業終了

７月21日(水)　清掃後、全景写真撮影

７月22日(木)　図化作業（遺構平面図）



第４図　基本層序模式図



第５図　地形及び区割図（Ｓ＝1/1,000）

4．遺　構

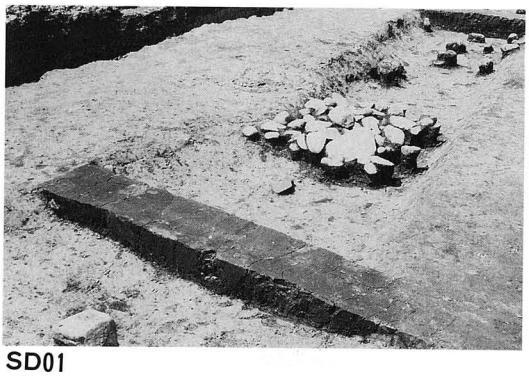
今回の調査で確認した遺構は掘立柱建物１棟・溝１条・土坑46である。以下、主な遺構についてのみ、その概略を記述する。

ＳＢ01　ＳＫ07・ＳＫ08・ＳＫ09・ＳＫ10が、柱間約2.8ｍで並ぶことから、ＳＢ01とした。なお、北方へ伸びる可能性があるため、北側へ拡張することとしたが、結果的に柱穴は確認できず、一間×一間の規模となった。床面積は7.36㎡となる。柱穴の覆土は、黒色（10ＹＲ２/１）シルト質ロームないし、黒褐色（10ＹＲ２/３）シルト質ロームである。柱穴の深さは、10cm～25cmである。ＳＫ08からは土師器が出土しているが、細片であるため、時期決定にたえうるものではない。

SB01

ＳＤ01　幅120cm～230cm、深さは、10～30cmである。ＳＤ01のある調査区西側はかつての圃場整備時にかなり大規模な削平を受けているにもかかわらず、南側の遺存状況は良いと言える。北側は、削平によりプランの検出が困難であった。この溝は、調査区の西側を南北方向に走り、南側で終わる。溝底のレベルからみると、北から南にかけての水の流れが考えられる。

覆土は、２つの層に分かれる。まず、第１層は、黒色（10ＹＲ２/１）シルト質ロームである。これをベースとして黄褐色粘質土・褐灰色粘質土を小さなブロックとして含む。また、炭化物を微量に含む。５～30cmの礫を多く含み、溝の中央より南のＸ26・Ｙ21、Ｘ27・Ｙ21で20～30cm大の礫が集中している所がある。埋土時に投棄されたものと考えられる。出土遺物は土師器(古墳)、土師器・須恵器がある。この第１層の厚さは、10～30cmである。第２層は、黒褐色（10ＹＲ２/３）ロームで鉄分を多く含んでいる。また、若干ではあるが砂も含んでいる。この第２層の厚さは、０～５cmである。第１層と同じく礫含むが、第１層より小さめの、５～20cmのものが多く入る。礫の多さは、第１層の方が多い。この第２層に、安定した砂の堆積等の水流堆積が見られな



SD01

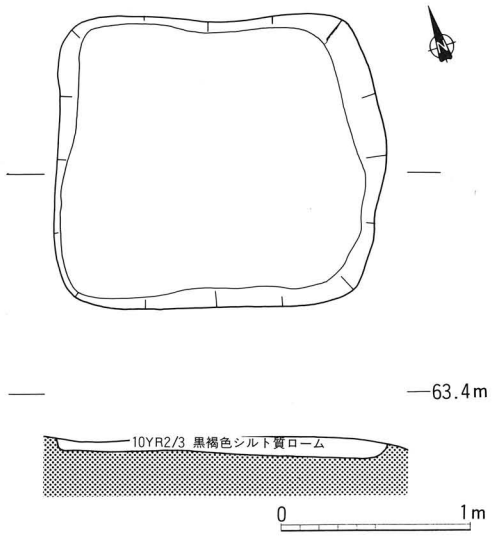
SD01　遺物出土状況

いことから、常時水の流れがあったとは考えられない。出土遺物には、土師器（古墳）土師器須恵器（古代）中世土師器・珠洲がある。

所属時期については、第２層床面直上から中世土師器・珠洲が出土していることから、中世と考える。

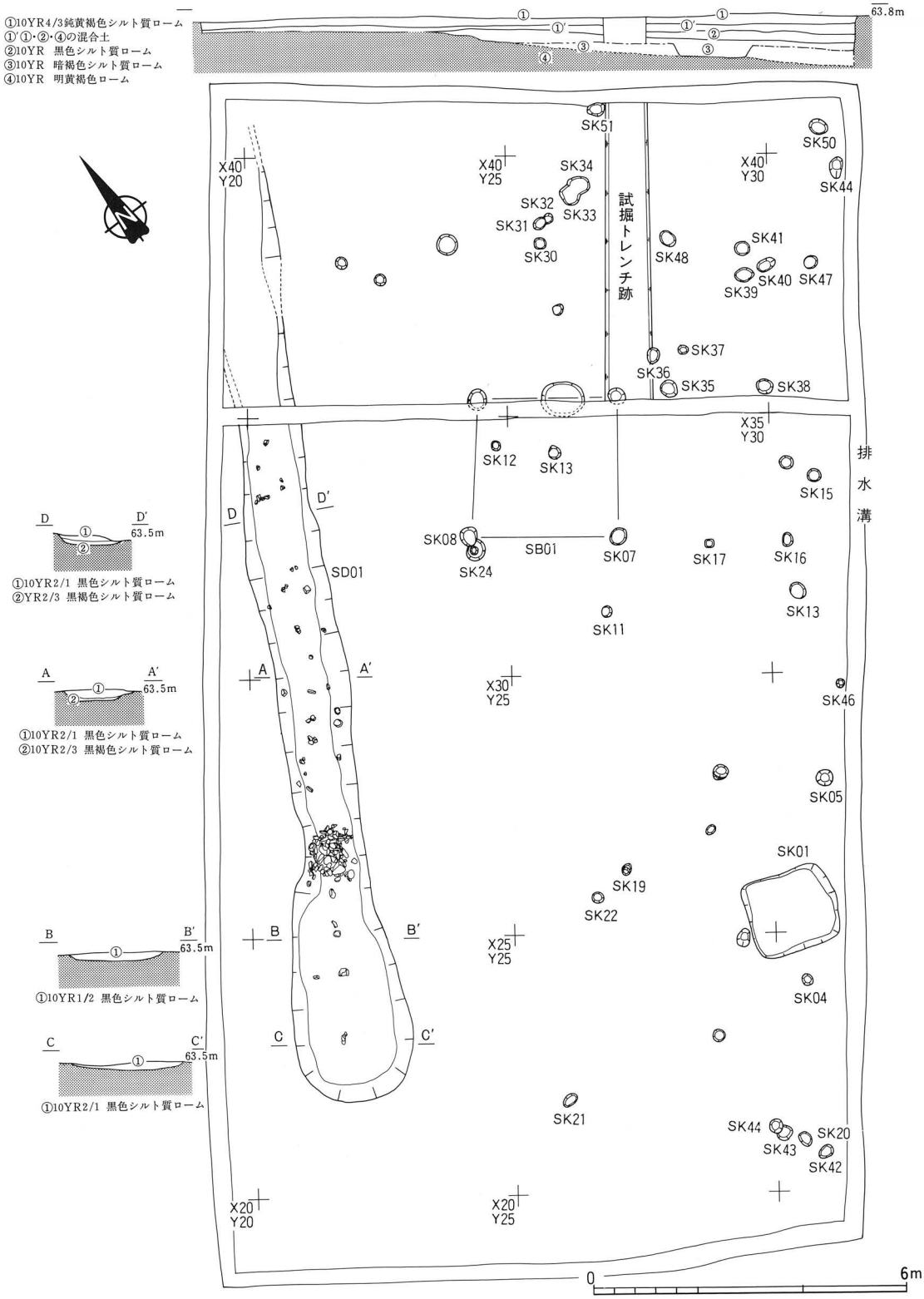
ＳＫ01　370cm×440cmの隅丸方形を呈し深さは、５～10cmを計る。覆土は、黒褐色（10ＹＲ２／シルト質ロームである。出土遺物は、古代の土師器・須恵器が多く出土しており所属時期は当該期と考える。　（伊佐　智法）

SK01



第６図　SK01実測図S＝1/40)

調 査 区 全 景



第７図　遺構全体図（S＝1/120）

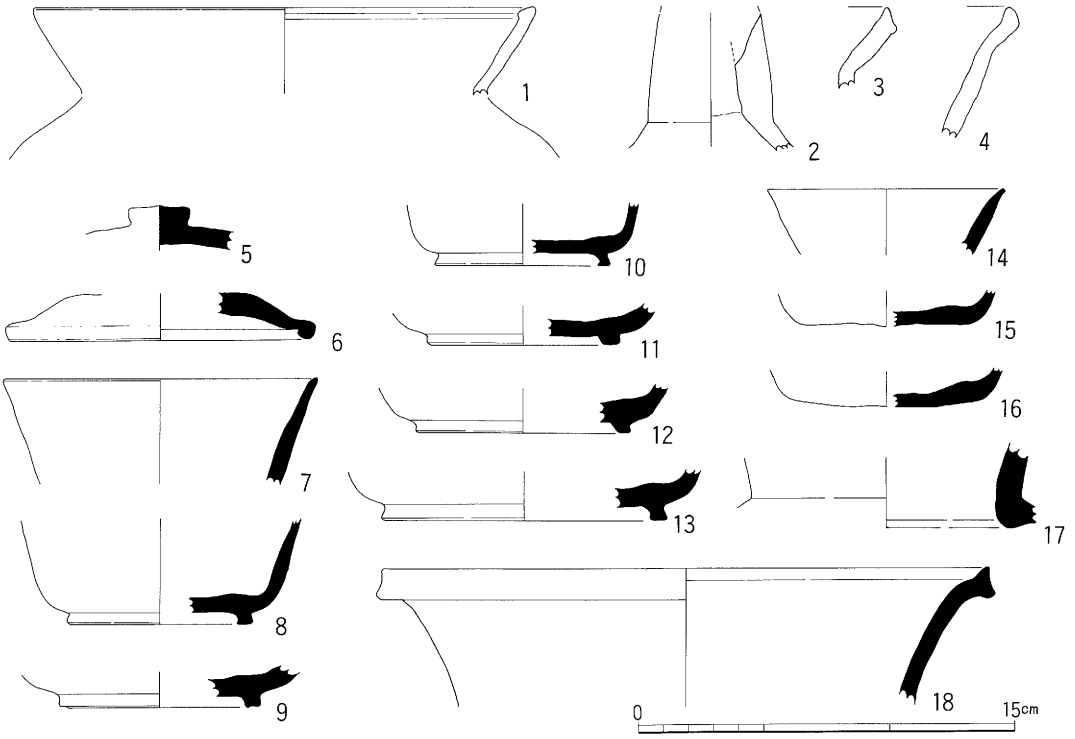
5．遺　物

出土遺物には、土師器（古墳時代）、須恵器・土師器（古代）、珠洲焼・土師器（中世）、その他近世以降の陶磁器類が認められる。いずれも２層および遺構覆土からの出土である。

古墳時代　甕、高坏の細片が２点のみ出土している。１はＳＤ01覆土上層から出土した甕口縁部片で、口縁内面を肥厚させる布留系甕の特徴を色濃く示す。県内では数少ない資料であるため図化復元を試みたところ推定口径は約20cmを測る。２は５世紀代に属すると見られる高坏脚部である。ＳＫ01覆土内出土。

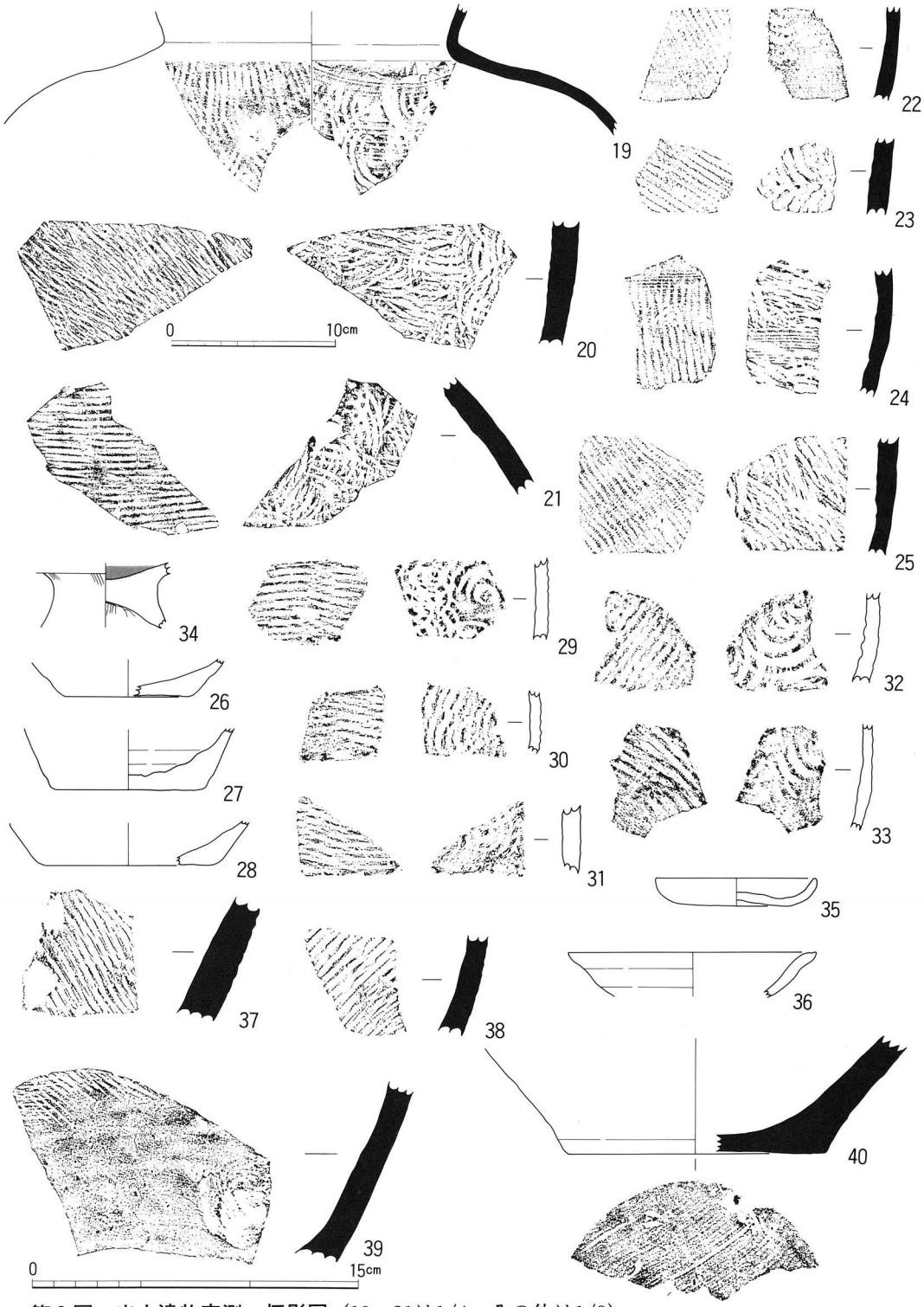
古　　代　須恵器坏（５～16）・甕（19～25）・双耳瓶（17・18）、土師器甕（３・４・26～33）などが出土している。須恵器杯はＡ・Ｂ類が認められる。坏Ｂ類は、法量的に大半が口径11cm～13cm、器高４～５cm内に収まると推定され、坏Ａ類（14～15）はさらに小型である。18は口径24cmを測る双耳瓶の口縁部である。口縁端部は内・外端部を上下に引き出す。17は一応双耳瓶としたが、壺類頸部の可能性もある。土師器甕は詳細を知り得る個体はない。口縁形態は、外傾し端部を面取りして上方に引き出すもの（３）、外傾し端部を途中で内側に巻き込むもの（４）が認められる。胴部は下半部に叩きを施す個体が多いようである。34は脚台状製品であり、内面に朱塗り痕跡を残すが器種・用途等の詳細不明である。

中　　世　土師器皿（35・36）、珠洲焼甕（37～39）・擂鉢（40）が若干出土。35は試掘調査時にＳＤ01底面から出土。36は２段ナデ成形で口縁部が受口状を呈する。　　（島田　修一）

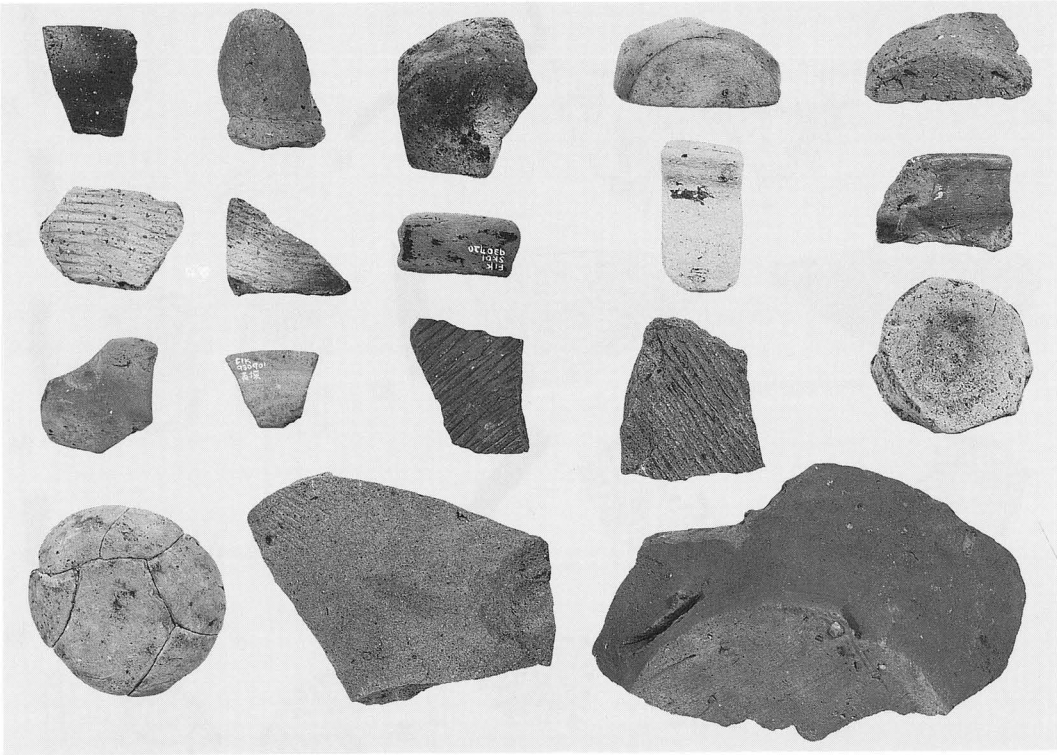


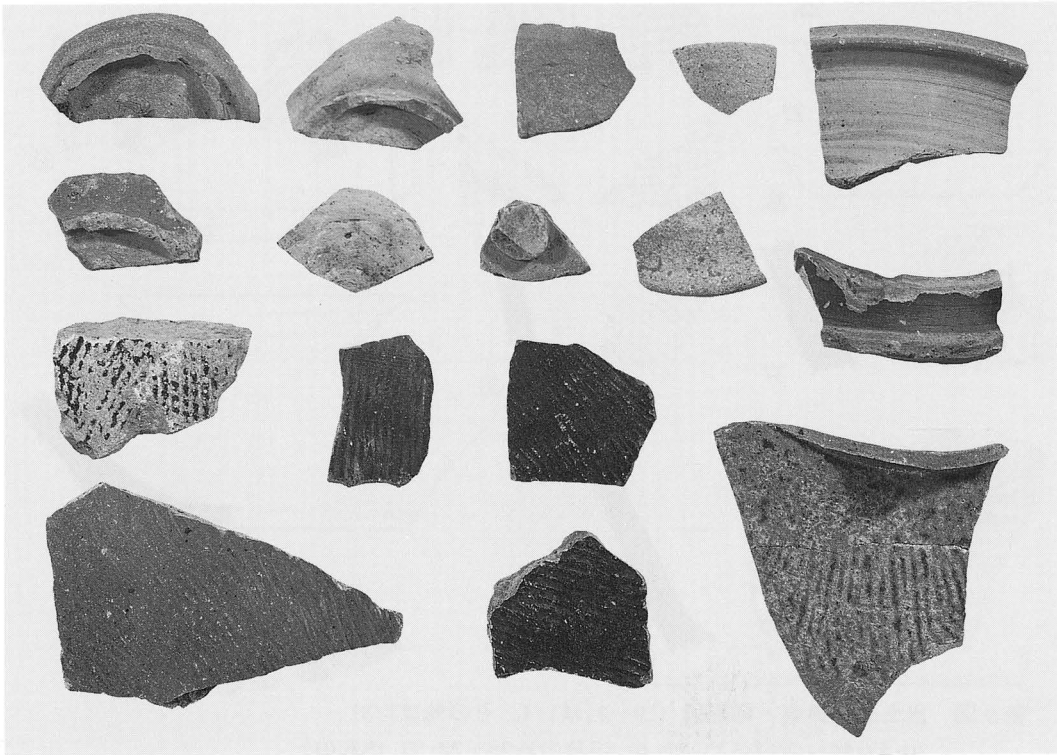
第８図　出土遺物実測図（1/3）

1・6・11・18（SD01），2・3・4（SK01），12（SK25），その他は試掘調査および包含層より出土



第9図　出土遺物実測・拓影図（19～21は1/4、その他は1/3）
20・23・29～32・34・35・39・40（SD01）・26～28・33（SK01）
その他は試掘調査および包含層より出土





出　土　遺　物

Ⅳ．まとめ

これまでに述べた点を要約・補足しまとめとする。本書で報告した岩木遺跡は、平成２年度に町工場用地造成に先立って実施された分布調査によって確認された遺跡であり、本格的に発掘調査の手が及んだのは今回が最初である。

調査の結果、古墳時代から中近世にかけての遺物、古代・中世の遺構を検出した。従来の知見では当遺跡は古代・中世の集落跡と理解されていたことから、出土状態は極めて不良であるが、古墳時代の遺物の出土は新たな発見として注目される。

また、古代の遺構・遺物については８世紀後半から９世紀前半に比定できる。当遺跡の近接地に所在し７世紀中葉から９世紀前葉頃まで営まれ、８世紀代に最も盛んに操業されたと考えられる安居・岩木古窯跡群（第１図）に深い関わりがあるものと想定される。中世については、13・14世紀代の遺物が僅かに出土したのみで遺構の性格も明らかでないが、医王山信仰に結びついて最も当遺跡が栄えた時期であったと考えられる。

しかしながら、今回の調査は個人住宅建設に先立つ極めて緊急的な調査であったため、発掘面積も約290㎡と狭い範囲であり、加えて対象地はかつてのほ場整備によって著しい攪乱を受け、遺構等もかなり削平されたことが判明した。このため遺物も出土量は極めて少量でかつ殆ど砕片であった。よって、当遺跡の性格などの詳細を明らかにするには至らず、その様相を解明する手がかりを得たに過ぎない。

ただ、当地域が前述の古代古窯跡群・医王山信仰と密接に関わり古くから開けていたことは疑う余地もなく、今回の調査地点の隣接地にそれを裏付ける遺跡が所在するものと推定される。今後、新たな機会にその一端が明らかにされることを期待したい。　　（島田　修一）

引用・参考文献

ア　安念幹倫・林　浩明・山森伸正　1984「安居・岩木窯跡における新資料の紹介Ⅰ」『大境』第８号　富山考古学会

ア　安念幹倫・林　浩明・山森伸正　1985「安居・岩木窯跡における新資料の紹介Ⅱ」『大境』第９号　富山考古学会

イ　池野正男　1988「越中における須恵器生産の概要」『シンポジウム北陸の古代土器生産の現状と課題』　石川考古学研究会・北陸古代土器研究会

池野正男　1988「射水丘陵における９・10世紀の須恵器」『大境』第12号　富山考古学会

医王山文化調査委員会　1993『医王山文化調査報告書　医王は語る』富山県福光町

フ　福光町史編纂委員会　1971　『福光町史』上巻　富山県福光町

ミ　宮田進一　1992　「越中における中世土師器の編年」『第５回北陸中世土器研究会　中世前期の遺構と土器・陶磁器・漆器』　北陸中世土器研究会

ヨ　吉岡康暢　1989　「総論珠洲古陶」『珠洲の名陶』珠洲市立珠洲資料館

報告書抄録

ふりがな	とやまけんふくみつまちいわきいせき
書名	富山県福光町岩木遺跡
副書名	個人住宅建設に先立つ発掘調査報告
編著者名	荒井　隆　島田修一　伊佐智法
編集機関	富山県埋蔵文化財センター
所在地	〒930-01　富山県富山市茶屋町206-3 ＴＥＬ 0764-34-2814
発行機関	福光町教育委員会
所在地	〒939-16 富山県西砺波郡福光町荒木1550 ＴＥＬ 0763-52-1111
発行年月日	西暦　1994年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
岩木遺跡（いわきいせき）	西砺波郡福光町 岩木	6421	027	36° 35′ 09″	136° 53′ 04″	19930701 ～ 19930722	290	個人住宅建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
岩木遺跡	集落	古墳		土師器	なし
		古代	土坑　基	土師器・須恵器	
	散布地	中世	掘立柱建物1棟 溝　1条	中世土師器・珠洲焼	

調査参加者

高桑祐樞・本居啓夫・中田順良・柴田　睦・尾川澄子・井口　操・井口よし子・渡辺久勝・渡辺すげ・幅田しぎ・柴田敏子

富山県福光町
岩　木　遺　跡
－個人住宅建設に先立つ発掘調査報告－

平成６年３月31日

編　集　富山県埋蔵文化財センター
発　行　福光町教育委員会
印　刷　日興印刷株式会社